

ポイント 10 有珠新山と大有珠

A) 有珠新山 (潜在ドーム)

- 1) 南外輪展望所から見た有珠山は到底登頂不能に見える (売店街から見る昭和新山溶岩塔も同様である)。生成機序としては北外輪から確認した火山列 (北弱線) とほぼ並行する第一大有珠屋根山から金比羅山を結ぶ中央弱線の切れ目から、上昇マグマの押し上げ力で、北側の蝶番を軸に観音開き様に隆起したように考えられる。お陰で北側からは緩傾斜を容易に登る事が出来る。
- 2) 一帯は多種多様な手法の砂防施設が施されている。手法は多様でも基本は流下エネルギーを減ずることに尽きる。例えば斜面上に階段状に見える等間隔で等高線を結ぶ棚状構造は、相対的な傾斜角を減ずる工法である。沢状地形では流下土石に露面を削られないよう、石詰め蛇籠やコンクリート・ブロックで強化されている。
また一部地域では杭に柳枝を編む工法で実施したが、後にその柳が発根・発芽して線状に並ぶ柳林となって砂防効果を上げている。
- 3) 砂防工事によるものの他に、山頂部から幾本も斜めに走る段差が見える。隆起現象で良く見られる“階段状断層”である。植生回復で今日殆ど意識されないが、有珠山の山体は、大小の傷で満身創痍の状況であり、火山は積み木を無秩序に積み重ねた状態の脆い構造であることを認識しておくべきである。火山、特に有珠山では「不動如山 (動かない事、山の如し)」は通用しない。



(写真 : 噴火から 1ヶ月、小有珠 [左側] と大有珠 [右側] の間に隆起する新山)

厳重注意事項 有珠新山山頂部は南側の急峻な斜面の浸食・崩落により、一見安定地盤に見える箇所も、オーバー・ハングになっており、鳥の嘴状に突出し、草の根に支えられているだけで、人間の体重を支えられるものでない!



(写真 - 2 : 噴火から1ヶ月、隆起する新山 大有珠側から)



(写真 - 3 : 噴火から1ヶ月、隆起する新山 小有珠側から)

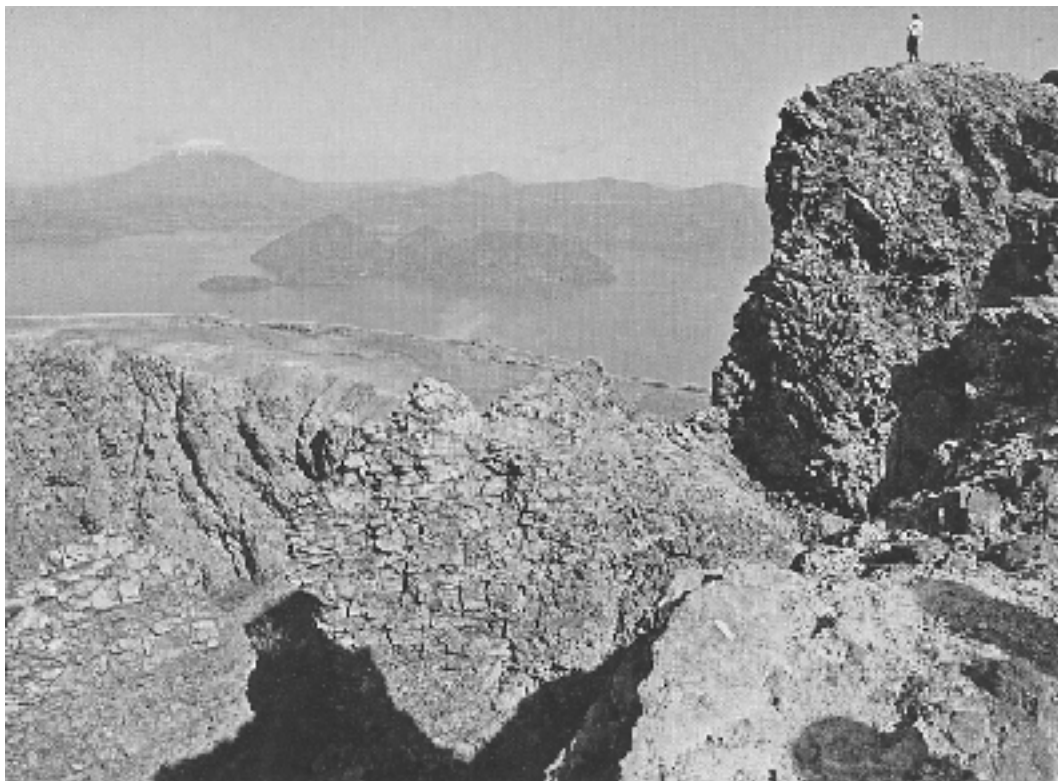
B) 大有珠（熔岩ドーム）

有珠山の最高峰である。面白い事に 1910 年以降の 1/5 万地図で標高を調べると、大有珠は標高を高め、小有珠は乱高下、昭和新山は順調に低くなっている。（資料参照:2）

1853年噴火で形成されたデイサイトの溶岩ドームであるが、昭和 40年代にこの地を訪れた時は、長流川に由来すると思われる川原石が点在していた。

地形図に見る有珠山標高変化

	大有珠	小有珠	昭和新山	校本山	明治新山	金比羅山	夏丸山	オガリ山	有珠新山
明治48(1915)年発行 1:5万尺『四巻湖』	652m	677m	-	-	-	-	-	-	-
大正 9(1924)年発行 1:5万尺『旭岳』	725m	611.4m	-	-	-	-	-	-	-
昭和28年修正測量 昭和51(1956)年発行 1:5万m『旭岳』	725m	599.1m	435m	282m	-	-	-	-	-
昭和45(1970)年発行 1:5万m『旭岳』	727m	598.8m	465m	-	252m	312m	-	-	-
昭和53(1978)年発行 1:5万m『旭岳』	727m	598.8m	467m	-	252.5m	312m	-	-	-
昭和58(1983)年発行 1:5万m『旭岳』	727m	552m	462m	-	253m	321m	307m	-	-
昭和58(1983)年発行 1:5万m『旭岳』	727m	552m	462m	-	253m	321m	307m	645m	-
平成13(2001)年発行	727m	557m	392m	-	251.5m	325m	307m	672m	662.5m



(写真) - 1 昭和 40年代の大有珠山頂



(写真) - 2 昭和 40年代の大有珠山頂

裏 (写真) 77噴火以前の大有珠山頂より小有珠・銀沼・火口原を望む。

